

うになるのも死生観を持ち始めた縄文人の発達した精神性を示しているであろう。

また、土器に施された華美な文様やさまざまな器形から縄文人の発達した精神文化をうかがい知ることができる。実用品である道具にさまざまな装飾を施すことは今の私たちも行っているが、形状から直接機能が推定できない土偶・石棒といった呪具や耳飾・貝輪などの装身具が出土するようになる。土偶は縄文時代早期に出現するが、前期までの段階のものは細部まで造形されない簡素な作りの小型品である。中期になると東日本で発達し、顔や手足がはっきりと表現されたものが現れ、大型の製品が作られるようになる。後期には全国的に広がるが、東日本に比べ西日本では発達が低調である。晩期には東北地方の亀ヶ岡式に伴い遮光器土偶が発達するが、晩期終末には西から土偶は激減していく。男性器を模した石棒は中期から晩期にかけて東日本を中心に広がりを見せる。

装身具として普及しているのは貝製の腕輪である。早期には出現し、全国的に分布している。貝輪の材料は鹹水性のサルボウ・アカガイなどの二枚貝とオオツタノハ・アカニシなどの巻貝が使用されることが多い。材料となる貝の生息域から離れた場所でも出土する例も見られ、交易品であった可能性が高い。

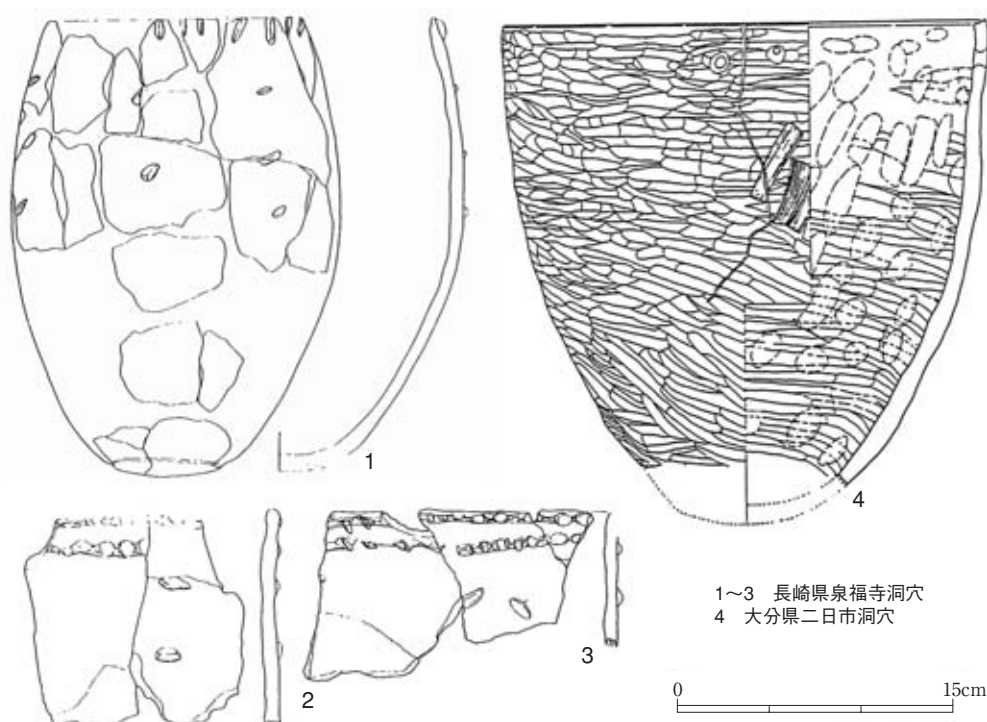
二 土器の地域性と文化

縄文土器という名称は、エドワード・モースが大森貝塚の報告書の中で「縄により施文した土器」と表現したことが始まりである。しかしモースは貝塚出土土器の名称として縄文土器と呼んでおり、これは今日の縄文時代研究の中でも息づいている。縄文時代には各時代・各地で多種多様な土器が作られている。これらの土器の中には縄文、つまり縄によって文様をつけられていない土器も数多く含まれている。こうした縄文土器の研究は、時期を草創期から晩期までの六期に区分して行われている。この地域でこの六期の土器がすべて出土しているわけではないのであるが、できるだけ近い地域の土器形式を使って各期の土器の変遷について説明してみたい。

草創期

最古の土器群である隆起線文土器は、口縁部に粘土紐を張り付け横向きの文様をつける。九州では、起点と終点が同じ環状のものから螺旋状に施文するものに変化する。土器の形は深鉢である。長崎県の泉福寺洞穴10層出土土器を標識とする豆粒文土器は隆起線文土器の最古段階である。粘土粒を張り付けて施文する。

九州ではこの段階の石器は、旧石器時代終末の細石刃が引き続き用いられている。



1～3 長崎県泉寺洞穴
4 大分県二日市洞穴

図2-22 草創期の土器

早期

早期になると、草創期の丸底・平底から尖底の土器が現れる。押型文土器は、土器外面に山形、楕円、格子目などの模様をつけた原体を押しつけて施文した土器である。川原田式、稲荷山式、早水台式、下菅生B式、田村式、ヤトコロ式、石清水式、手向山式が設定されている。器形は下菅生B式までは砲弾形で、田村式では丸底、ヤトコロ式では平底になる。施文は、田村式以降粗大化する。押型文は中部地方から九州北半までの広い範囲に分布し、盛んな文化交流を伺わせる。

早期末には塞^せノ神式^{のかん}土器が、南九州を中心に九州全域に分布する。平底、円筒状の胴部にラップ状に開く口縁部をもつ。撚糸文を回転押捺するA式、貝殻による条線・連続刺突文を施すB式に分けられる。

前期

アカホヤ層の上層では、南九州の土器の系譜は途絶え、轟式・曾畑式といった西北九州を中心とした土器が九州全域に広がっている。轟式土器は、貝殻による条痕文と隆起文を特徴とし、熊本県轟貝塚の土器を標式とする。施文の特徴からA～D式に分類される。A・B式は貝殻条痕文に隆起帯文を持ち、B式は隆起が強い。C式は波状文を主体とし、D式は条痕文がみられない。

次に続く曾畑式土器は熊本県曾畑貝塚を標式遺跡とする。器形は深鉢、浅鉢で丸底がある。細い棒状・篋状の工具により外

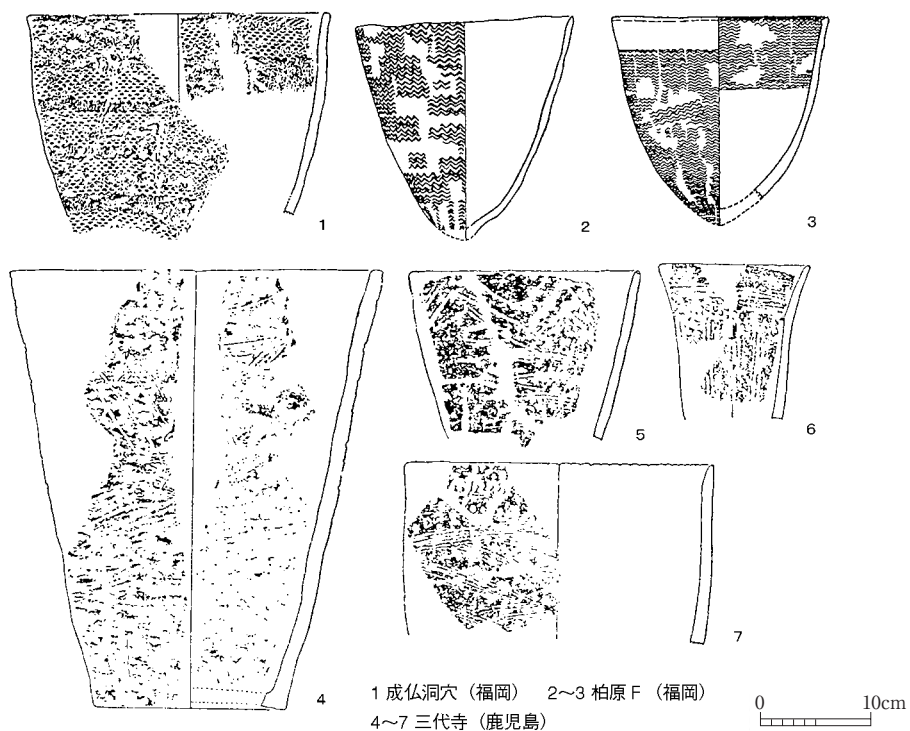


図2—23 早期の土器

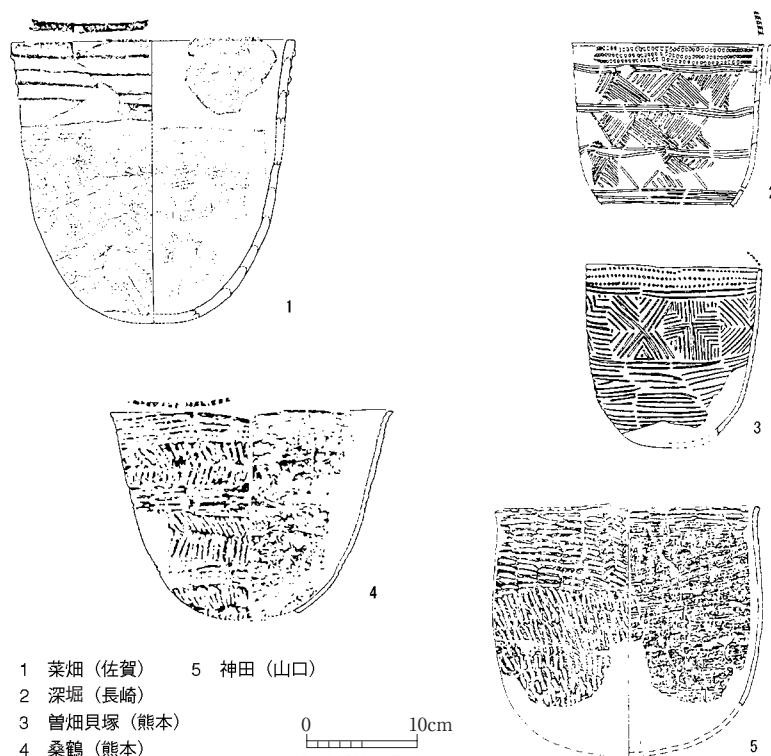


図2—24 前期の土器

面全体に施文する。文様は口縁部・胴部・底部に区画し、刺突・押引・沈線を直線的に施文する。文様は外面全体に施される。西北～中九州では、胎土に滑石粉末を混入するものが多い。

中期

装飾が増す東日本に対し西日本では薄手で簡素な土器が続く。並木式土器は鹿児島県並木遺跡を指標とする。前期の貝殻文を受け継ぎ、太く浅い凹線の間を二枚貝の腹縁や篋^{へら}で刻み目を施す。この凹線文は次の阿高式へと引き継がれる。阿高式^{あだか}は熊本県城南町の阿高貝塚を標式遺跡とし、前期の曾畑式同様縄文を施さない。指で入組文・渦卷文等の曲線を太い凹線で描く。胴部上半部のみ施文するⅠ式、胴部全体に施文するⅡ式、口縁部のみ施文するⅢ式に分類される。Ⅱ式では胴部の文様に縦方向の施文が加わる。Ⅰ・Ⅱ式は九州全域に分布するが、Ⅲ式は有明・八代海沿岸に分布する。また、東九州を中心に瀬戸内の船元式が分布する。船元式は岡山県倉敷市船元貝塚を標式とし、中部地方から九州に広く分布する。キャリパー状に開く口縁部が特徴的な平底の鉢形土器である。Ⅰ式は全面に太く撚りの緩い原体による縄文を施し、貝殻の圧痕、竹管による爪形を加える。Ⅱ式は口縁部が直口に近くなり、縦走する縄文に爪形や刺突を施した突帯を張り付ける。Ⅲ式では口縁部が内湾し、頸部がくびれた丸みのある鉢形となる。縦位の縄文に突帯と竹管による平行沈線文が施され

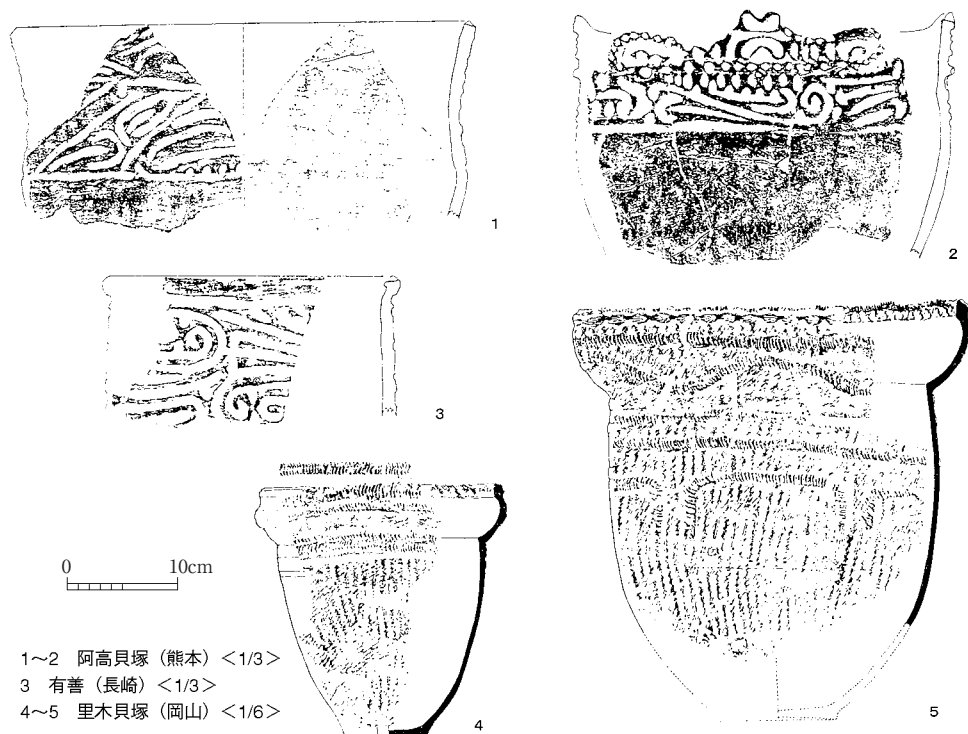


図2—25 中期の土器

る。IV式はⅢと似た器形で縄文が異条斜縄文となる。

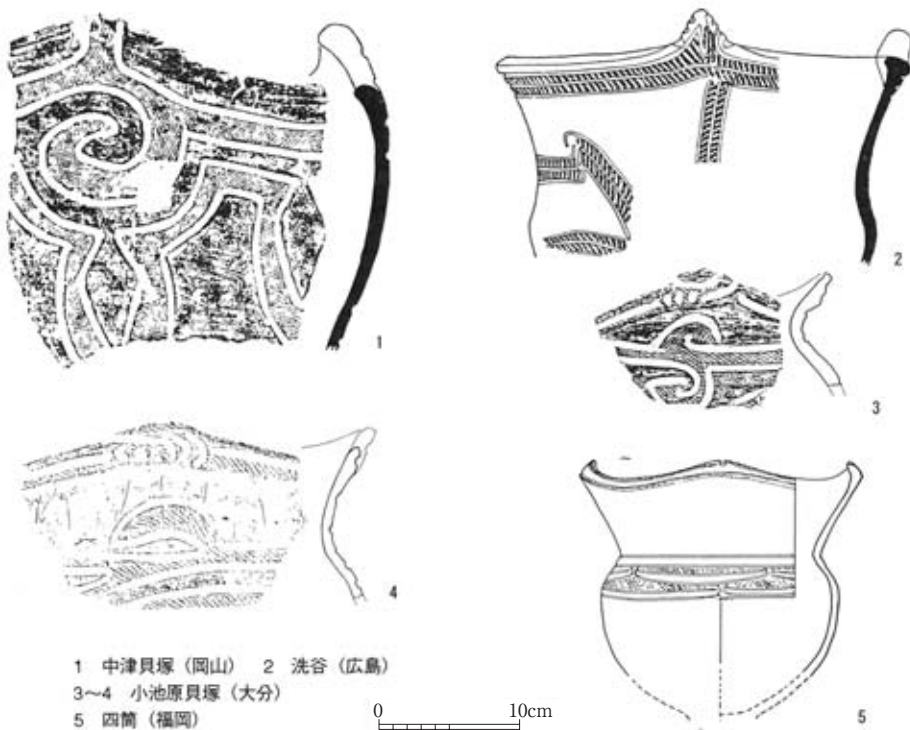
後 期

後期には磨消縄文^{すりけし}を特徴とする瀬戸内の中津式・福田KⅡ式が分布する。岡山県倉敷市の中津貝塚を指標とする中津式土器は近畿地方・中四国地方・福岡・大分県まで広がる。太めの沈線で描いた曲線の内側に縄文を施す磨消縄文のもの、沈線文のみのものがある。器形は胴部で緩くくびれる深鉢、口縁部がやや内湾する鉢がある。やはり倉敷市の福田貝塚を標式とする福田KⅡ式土器は中津式同様全面に磨消縄文を施す。中津式に比べ細い三本の沈線を施し、沈線の内側のみ縄文を施す。口縁部が緩く外反するもの、内側を厚くするものが多い。この型式の分布範囲は熊本県まで広がる。

福岡県玄海町の上八貝塚^{こうじょう}出土土器を標式とする鐘崎式土器^{かねがさき}は、胴張りが強く頸部で外反する鉢・浅鉢を中心とする土器である。胴部には、入組渦文・入組鉤手文^{かぎ}が特徴的である。

後期前葉に編年される小池原上層式土器^{こいけはら}は大分県大分市の小池原貝塚を標式とする。胴部に沈線による渦文・鉤手文を描き、その内部に縄文を施す磨消縄文である。頸部で緩く屈曲し、波状口縁となる深鉢が特徴である。

中九州を中心に分布する後期中葉の北久根山式土器^{きたくねやま}は熊本県熊本市の北久根山遺跡を標式とする。平らな口縁を四分して「W字」状の粘土紐を張り付け、口縁部の施文帯には短い斜線



1 中津貝塚(岡山) 2 洗谷(広島)
3~4 小池原貝塚(大分)
5 四箇(福岡)

図2-26 後期の土器

文を施す深鉢が特徴的である。口縁部に縄文・貝殻疑似縄文を施し、胴部に曲線・屈折直線文を施した鉢がある。

後期中ごろの西平式土器は熊本県竜北町の西平貝塚を標式とする。「く」の字形の断面となる波状口縁をもつ磨消縄文の深鉢を特徴とする。口縁部と頸部にかけて平行沈線文・刺突文を施し、口縁の頂部には切込みや押点文を施す。

後葉には熊本県泗水町の三万田東原遺跡を標式とする三万田式土器が九州全域に分布する。Ⅰ式の鉢は球状の胴部とくびれた頸部を経て「く」の字状に屈曲した波状口縁となる。口縁の頂部は「U」字形に切れ込む。口縁部と胴部上半に磨消縄文による文様帯をもち、沈線を施す。沈線には「X」字文がみられる。浅鉢は口縁部が内傾し、口縁部に磨消縄文帯をもつ。いずれも底部は上げ底状となる。Ⅱ式では注口・高坏形・皿形が器種に加わる。鉢の口縁は平縁が中心となる。文様帯の施文に細線文や凹点文が加わる。Ⅲ式は横位の沈線文を主とし、凹点文・扇状貝厶文・三角形刳込文を施す。

晩

期

熊本県城南町の御領貝塚を指標とする御領式土器の段階になると磨消縄文等は施されなくなり、黒色磨研土器となる。器形は底部がわずかに上げ底となる深鉢・浅鉢が主となる。「く」の字に屈曲する口縁部と胴部に凹線を巡らせ、楕円形の押点を施すことが多い。糸島郡二丈町の広田遺跡、大分県緒方町の大石遺跡を指標とする広田式、大

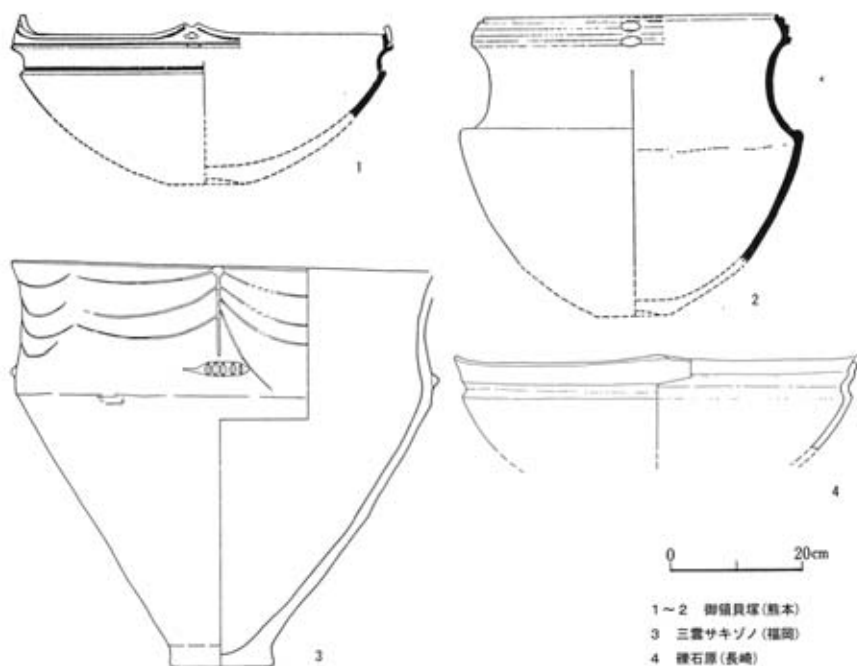


図2-27 晩期の土器

石式は御領式の系譜を継ぐ型式であるが、いずれも凹線が沈線に省略され、楕円形押点も小型化する。続く黒川式は鹿児島県吹上町黒川洞穴遺跡を標式とする。黒色磨研の精製浅鉢と貝殻条痕の粗製深鉢が代表である。浅鉢では口縁部の立ち上がりがなく、沈線で表現されるようになる。深鉢は胴張りする位置が高くなり、立ち上がりをなくした口縁部との間がくびれる。

従来晩期後半に位置づけられていた夜臼式^{ゆうす}に代表される突帯文土器は、弥生時代前期に含められることが多い。

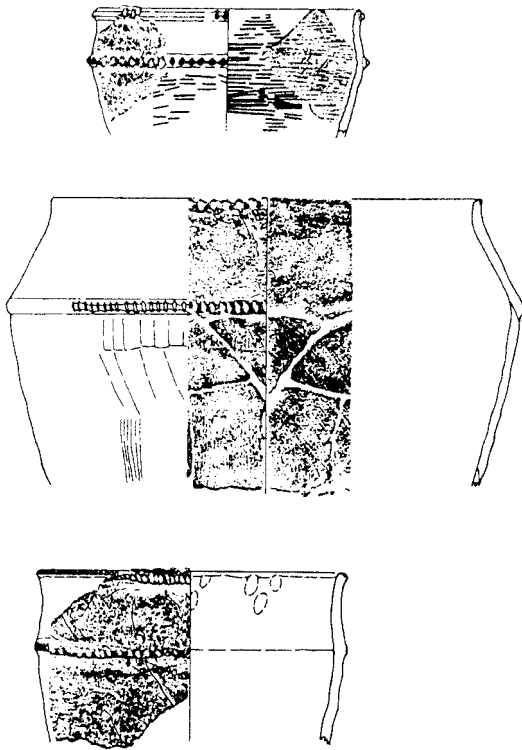


図2-28 突帯文土器

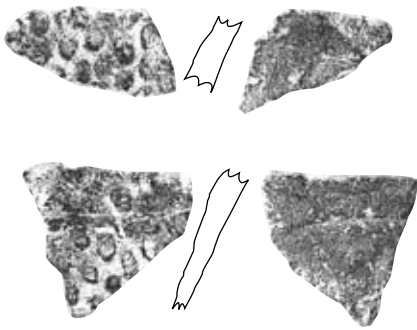


図2-29 黒田二又遺跡出土土器

第二節 地域の縄文文化

一 勝山町の縄文時代

勝山町内で知られている遺跡は二か所にすぎない。町内の各所でも縄文時代に属する可能性がある石器や落とし穴と推定される遺構が見つかつてはいるものの、時代を特定するための土器が出土しているのはその二か所のみである。これまでに調査した遺跡の出土品の整理が完全に済んでいないため、今後その遺跡数が増える可能性はある。

黒田二又遺跡

黒田二又遺跡は観音山裾に

あたり、県営基盤整備事業に伴い平成十二年に調査された。遺跡は観音山塊から伸びる綾塚古墳が立地する丘陵によって形成された東側の谷の深奥部にあたり、下方には二又池という農業用池が築かれていることから観察せられるように自然湧水が豊富な場所である。調査区は標高